

した。

アイヌの人に心優しき青年がある日猿となりしは何

新聞や週刊紙が煽情的に作りあげた「生命への畏敬の念などまったく持っていなかった」「生命感覚の喪失集団」(一九七五・五・二七朝日社説)では決してなかったのです。

自由連合論ノート 2

革命戦争とは何か

ウリ宣言の意味

向井 亨

自分自らのではなく、他人の生命、他人の死を、一顧だにしない者への怒りこそが彼らの行動となったと信じております。

一九七六年十二月二四日

東アジア反日武装戦線公判廷にて

とか「原則的にはそうだが、ウリ支持者にはなりえない」とか、いろいろの立場がある。

① ウリ宣言の冒頭にある人いかなる戦争にも反対するVという字句と内容は、相当問題があると思う。

「いかなる戦争にも」というときすぐ出てくるのは、「革命戦争」。それにも反対なのか。あのベトナム「解放」戦争にも反対か、と。

「その一点にひっかかるので、私はウリに賛成しない」

② それらの立場や意向に対して、ウリはすこしも異議をはさまないだろう。ウリはどんなときでも、統一的な見解を押しつけ強いる立場はとらない。その人自身の判断にゆだねばその内容はないと確信しているからだ。だから否定的な意見でも、それとして受けとめ認める。もちろんウリの仲間になるというとき、それでもかまわないし、厳密に内容追求することはない。

③ なぜならウリ宣言が提起した問題は、その確認の

如何にかかわらず、まじめに対応するかぎり、たとえ否定的にせよ、ひっかかりとして残るだろう。つまり無視や黙殺でなく、否定として対応として出てきていることを大切にしたい。その否定的ひっかかりから、ウリ宣言は、ある意味で出発するのだとも云える。―そして、だから、メンバーや支持者でない人へも、ウリからの人見えない自由連合Vの信号は、たえず送りつづけることになる。

④ でも何というか、人めいめい自由な受止め方といっても「あいまいなままでは、やはり、どうも」という声がしきりにする。それにもまして、参考的にでもウリの基準の見解を知りたい、という傾向もなにかま内にある。もとよりA基準の見解Vなんてものはウリには本来ないだからここにかくのはあくまでごく個人としてのものである―

⑤ Aいかなる戦争もVというときの、A革命戦争Vを云々するとき、その革命戦争の「どこらへんに自分がいのか」を考えながら論ずると、問題はより具体的になり深化すると思う。―さらに、革命戦争が日本で（その

前提的狀況を一応ぬきにして）起ったとする。と、自分はどうするか。あるいは、どうなるか。

戦争、つまりドンパチに限定して云えば、ことと次才そのとき投げ込まれた場所によって、ぼくもドンパチやったり、やらなかったり、否応なしということじゃないか。「いかなる戦争にも反対」であつたとしても、ドンパチに加わるという状況も出てくるだろう。

だからそのときの問題は、ぼくがそのようなどうしようもない時流に投げ込まれて、その流れのなかのどこにいるか、そしてどう泳ぐか、動こうとするかである。

革命との関係でいえば、自分がそのときどんな場所、どんな役割を果すものであるか、ということだ。

⑥ もっとぼく自身に即してみると、そのときおそらくぼくは現在と大差がないことをやってるにちがいない。―つまりもう三十余年もやってきたことと同じ市民大衆運動グループの一人として、たとえばウリを名乗って動いているいまの程度と―そして発展はないだろう。そういうグループで活動？していて、だからとつぜん受動的に革命戦争を迎える―ある日とつぜんドンパチのはじまりに出会うということになる。

とすれば、その革命Vとの突然の関係ということでは、
ぼくのそのときの姿勢は、革命状況と相当のくいちがいが
あることが当然想定される。そして革命は、ぼくに今
までのような中途半ばな立場を許さないだろうし、また
ぼく自身も、変動の中で同じ姿勢を維持することはしな
いだろう。つまりそのような中途半ば性としての自分の
立場は、いまの徐々の変化以上にはげしく状況の変動に
比例してゆり動かされざるをえない。

改めて、自己の主体的判断において、どう動くのかを
迫られる

⑦ そのときのぼくが、自分の意志で動くとする主体
的判断の「目安」というか視座をどこにおくか。何を規
範とするか、である。もしそれがないと云うならば、い
まぼくがやっていることも、全くナンセンスというべき
だろう。

さくばらんに云えば、ぼくが動く目安は、たとえば
その革命の質とか内容、あるいはその成否とか動向、つ
まり自分にとってよいかわるいか、その利害などにおく
のではない。そのような傾向はどうしてもまぬがれぬと
しても、そのことを目安や規範には決してしない。

自分ではなく、では誰かと云うならば、その革命的ド
ンパチが刻々にもたらすものを、いまそのときの社会で、
一番つらく苦しいおもいをしている人たち、云わば最下
層階級の人々が、どんな意味で受けとめているか、である。
だからその人達の動向、考え方にできるだけ即して、自
分の立場と動きを具体的に考える―それがぼくの目安と
いうことになる。

⑧ ここで最下層の―というのはいわゆるプロレタリア
階級と呼ばれる、抽象化された概念的階級を指すのでは
ない。いま現在、もうこれ以上の下積みはない、奪われ
つくしてとられる何も持たない―そんな立場に権
力によって押しつけられている人たち、たとえば獄中者
やカマガサキなどの労働者、その家族たち、ハクに対す
る部落民など、その他の被差別窮民などを思いかべて
いるのである。

革命的ドンパチというとき、その人らにとって何であ
ろうか。どう出るだろうか。おそらくそれは「やめてく
れ、困る」という風ではないだろう。むしろ、「どうな
っても同じや。よしおれもやったる」ということかもし
れない。

⑨ たとえば―刑務所の囚人は、いまもつとも明確に権力の巨大な暴力の下にある。彼らにとって現状維持の秩序そのものが暴力であり抑圧である。とすればその秩序をゆるがすことにおいて、火事でも地震でも、それゆえ暴動・騒乱はなおさら、現状打開への一歩の期待へとつながるだろう。それこそ「失うものは鉄鎖のみ」で、無責任にもせよ革命的ドンパチに対してはむしろ「おもしろい、やれやれ」と云うにちがいない。自分の方へ弾丸がとんでくるとしたら「かめへん。しょうがない」――とまでサトリきらぬとしても「ええい、どうせ死ぬんや」ぐらいのあきらめで開き直るだろう。

⑩ だからすくなくとも、あの東アジア反日武装戦線の三菱ビル爆破をみ聞きしても、「こんなケシカラシことはない。無関係の市民まで殺すなんて……」というような立場は、決してとらないだろう。例えば、このことに対して朝鮮人はどう云うか。沖縄人は、水俣の患者は。その人達とちがって大学教授は、商売人は、会社員の主婦は……と考えてみると、その後者は自分の立場を守るということで、非難の声を出していることが判る。つまりここで、照し出されているのは、同一のことに對しても

その立場、階層によって、受けとめ方に大きなちががある――ということだ。

もちろんぼくが殺された市民だとすると、大いに困る、というより御免蒙りたい。としても、結局は天災みたいなことで、運わるくビルの屋上から何かが落ちてきて、それに当たったような災難だとあきらめる―事実ちよっと町へ出かけると、交通事故や何やかでどんな死に方がいつやってくるかわからない―死んでしまった以上もうしょうがない――ということになる。

だがその家族はそういかないかもしれない。「なんて私の夫をまきぞえにせんなんのや」とうらみ、憎むのも当然だろう。むしろ人情としてそれがあたり前。そして三菱ビルを爆破した人たちは「どうも申しわけない。そのつもりではなかった。どうか許して下さい。そのつぐないをどうかして果したい」と云わねばならぬと思う。だが問題なのは、その家族でも当事者でもない人たちが、「他者のまきぞえの死」をつかまえて自分のことのように非難するのは、一体どこらへんの立場、位置からの発言か、ということである。

果して一体おまえは、そのようなどんな資格をもつか――である。

云いかえると、日ごろイサマシク革命々と云う連中や、反体制を呼号する運動家まで口をそろえて、「無この市民を……」という、その発言は明らかに善良？な小市民の立場からのものだと言えろ。たとえばである。三菱ビルのオフィスに勤めたり、出入して周辺を通行するよかな市民は、すくなくとも最下層窮民ではありえない。たまたまカマガサキの住人がそのビルへはいるとしたらきつと守衛に呼びとめられるだろうことを想像しても判る。つまり市民は、カマの住民に比べると、より一そう「三菱」に近い立場にいる。

市民は、日々殺されつづけているに等しい立場の最下層窮民を、無意識にせよ三菱の側から見下ろす位置におり、それゆえに三菱を撃つとばつちりも時にはねかかることもありうるだろう。それもしょうがない——というその「場所」にいたということになる。

東アジア反日武装戦線は、そのような最下層窮民の立場をおのれの立場とすべくして、三菱を攻撃したことがあきらかだと思ふ。にもかかわらず問題の焦点をそらして、無この市民の名によって、あるいはまことしやかな革命の戦略戦術にかこつけて論難するとき、その擁護とする立場は何であるか、あまりにも明らかと云わねば

ならない。

さて、このような立場立場があるとき、ぼく自身はいわゆる一般的な市民の階層に属することは間違いないだろう。それゆえにこそそのことを肝に銘じておく。そしてもし革命的ドンパチに当面したとき——と云わずいまでもそのときも——ぼく自身の小市民的位置を照し出すものとして、それら最下層窮民とよばれる人たちの立場に、ぼくの規範を求める。それは東アジア反日武装戦線が最下層窮民の立場に立とうとする志向を暴力的方法に求めたことと、ぼくの非暴力直接行動が表現の質で大きく相違するとしても、その一点においては全く同じ志向だと思ふ。

⑪ 左翼あるいは反体制の立場をとる知識人や運動者のほとんどにとって、革命戦争は原理的に肯定すべきものとしてある。だがそれはやはり観念上の論理として、あるいは単に心情的思い込みで、というカッコをつけておくことも忘れてはならぬだろう。

(もともと論理や心情はそんなものだ。リクツで判つていても実践できない。たとえばアナキストの日常や行動

が必ずしもアナキズムそのものの体现でなく、しばしば權威主義的であるように――)

そこでより問題に近づいて、「では革命的ドンパチがおこったとき、自分は」ということで、じっくり考えてみると――その時の自分の場所やつとめ先、家の妻子や父母の事情、その縁辺や家族とつながる問題との関係が出てくる。つまり「その時は」でなく、いま現在この瞬間にすべてを切り捨てて、すぐドンパチにとび込めるということでないかぎり、内心では「いまは困る」とか「死ぬのはこわい」とか、いろんなことが出てくるにちがいない。

⑫ ではよく自身はどうするか(いざその時の大変事という、すこぶる心許ないが)、いまこの日常からドンパチ如何はかわらず、よくとその周辺の最底辺窮民たちの立場、その人たちのさまさまなうごきに即しながら、主体的に自分の判断とうごきを添わせることを、第一に考えたい、ということだ。

といっても、よくは依然として小市民的、それ故に差別別的な立場の日常を捨てておくもなく生きている。そのような立場をすてて、たとえばカマに入っただけとして

もカマの問題はほとんど変りないだろう。としたら、そのようなよくと底辺の人たちとの関係において「主体的に自分の判断とうごきを添わせる」とはどんな意味か。

第一に、よくは小市民であり、彼は最底辺窮民であるという一般的な階層関係は、個別的日常的なところでは(たとえばサルートンへカマのMさんが時々やってきて話をしたり食事を一しよにしたり、たまった切手をはがしたりするとき)しばしば友人であり、仲間としての関係に変わる――ということが出てきていると思う。またこのごろよく訪ねてくる宋斗会さんは朝鮮人で、よくは日本人だ。その差別は厳然として存在しながら、出会うことが重なるにつれて、二人の間の朝鮮人对日本人という関係を越えた、個的な知己・なかまという関係が出てくる――と思うことは、よくのひとりよがりだろうか。

第二に、そのような個的な関係を土台にし、かつ媒介にして、よくと最底辺窮民との一般的なむすびつきは、よく流の表現をとればA助っ人Vとしての関係――ということになる(A助っ人Vについては、説明不足だが、ここでは省略する)。それゆえ、助っ人としての主体性において最底辺窮民の側に、いつも身を置く。彼らを抑圧しているものを自分の敵として、そのような姿勢をとる

—ということが、「自分の判断とうごきを添わせる」ほどの出発点である。(ここのところは、いくら口でしゃべったりかいたりしても、実際に体のうごかし方で解決する以外にない問題のような気がする)

⑬ では、具体的な問題としてベトナム戦争に対して、ぼくはどう考え、どんな立場で動いたのか—というほどのことではなく、広言しにくいのだが—簡略に順序立てると、こういうことになる。

イ ベトナム人民がアメリカ勢力を追いつめるために闘うのは当りまえであって、世界の人民がそれを支持するのも当然だ。それは「いかなる戦争にも反対する」というぼくの立場にかかわらず、ベトナム人民側をぼくが支持するということが矛盾しない。なぜなら、その支持はドンパチを支持することではなく、ベトナム人民を支持することだからにほかならない。つまりぼくは、ゲリラを闘いする方法として原則的に支持(現代暴力論ノール参照)しても、ドンパチ戦争は支持しないということとで推量できるように、そのときの△支持しない△はベトナムの戦争に△反対△や△敵対△することではない。もっと現実的に云えば、ぼくがベトナムでのドンパチ戦

争には加わらない—兵士または軍隊関係要員にならない—という表明である。

そのことは、ベトナム戦争を支持した日本人もまた—たとえば方法さえあればすぐ義勇兵になる、といった行動をとらず—その現実のベトナム反戦のやり方としては、さして変らなかつたことを思えばはつきりする。

ロ かえりみてぼくのベトナム反戦運動への参加のしかたは、日本政府のアメリカ加担政策に反対し意志表示する、すこしでもそれを減殺するために抵抗する、—という国内運動に、ほんのすこしばかり加わっただけにすぎない。

そのときのぼくがベトナム戦争のなかの、ベトナム人民側に見ていたものは、戦局の進展というよりも、戦闘の渦中にまき込まれて、もっとも重荷を背負って呻吟流離している、南北最底辺にいる人たちを焦点にしたそれであった。すくなくとも戦闘の勝敗や帰結にかかわらず、常に問題としては、戦禍の底におかれた窮民を忘れ去ることが出来なかつたと云える。

—と、ここまで云うと、ぼくにとって△戦争△とは帝國主義国間のものにせよ、革命戦争にせよ、いかなるものでも戦争であるかぎり△原則的△に反対すべきものと

してあることが、はっきりする。そして、いかなる戦争でも、そのとるべき態度——原則的に、かわらないといえる。

⑭ ぼくにとっては、もしA革命戦争Vとあえていうとき、その革命とは一体どのようなものか、その内実と共に、具体的にぼくがどの立場に立つのかが問題である。

云いかえれば、戦争がどのような革命を最底辺下層の人々にもたらすか、それと自分との関係は——がきびしく問われなければならない。

だから、革命戦争支持——積極的にはそれをひき起し、発展させることだろう——者にとっては、そのドンパチをやりぬくことで、自分が何をどう望むか、望まぬか、もっと云えば、当座の展望にせよ、どんな革命をつくらうとしているか——の問題ときわめて切実にかかわっている。

たゞA革命Vと名のるだけでA戦争Vである革命戦争に對して、たゞ革命あるいは解放や独立と名がついているから何が何でもよいとは決して云えない。革命戦争ならともかくA支持するVとは、そう簡単にきめてしまえるような無責任な問題ではない。それにもまして革命戦争支持者に対する、いま現在が問うものは、「ほんとう

に本気本心でそうなのか。何かの論文でもよんでたゞそうとしているだけじゃないのか。」である。「そうでない」と云うなら——やゝ短絡的な云い方だが——では、つね日頃から革命戦争をめざした活動と訓練をやり、具体的には毎日一歩ずつでもその準備を進めているか、である。現実にはまるで他人がやらかすもののように革命戦争を遠望しながら——つまり革命家でもない自分がまるで革命家のように——たゞ観念と論理だけで革命戦争を論じているのではないか——ということである。そのことに対する自己省察もなしに、「革命戦争は支持する」ということの意味は、一体どんなことか——ということである。

⑮ とすれば、ウリ宣言にいう「私は、どのような戦争も支持しない」（最終色頁参照）ということの意味と内容とは、もうおのずから明らかだろう。

つまりいま現在ぼくらは、時に、遠い革命戦争を見物席で声援するということはあっても、当事者として革命戦争に直面していない。その渦中に巻込まれた状況にもいないということがある。そのことをはっきりと認識するならば、海のものか山のものかも知れぬ革命戦争を「支持する」ではなくて、人それぞれのちがいがあるにせ

よ、すくなくとも「留保」であってよい。さらに云えばその留保が「ドロンバチをやらないうような」「革命の追及」にあるなら、なおよいだろう。

云うまでもなくこの場合のウリ宣言の「支持しない」は「留保」と対立したり敵対するものではない。というよりもむしろ、各々個人がそれぞれに画く「革命V」「革命戦争V」—それがきわめて重大なことであるだけに—その革命に対するあらためての吟味的批判をうながすものとして、切実な重要さをもつ。それは革命像（或は未来をおぼろげながらもつくり出そうとするとき）の質を深めこそすれ、決して貶しめるものではない。

※

⑬ 付注 1

△どのような戦争も支持しないVを△どのような暴力もVとよみかえると、ほとんど同じ質の共通する一つの問題にぶち当ると思う。

現代暴力論ノート（三一新書「アナキズムと現代」収載）でややくどいぐらいにぼくは「単に△暴力Vということばで一しよに扱われている△個人暴力Vと△社会暴力V（構造暴力と云う方が判りやすいかもしれぬ）との相違—前者の自然性に対して、後者の反自然性において、

それはまったく異質のものであること。にもかかわらず暴力を論じるときつねにその二つは区別されず混淆されていること。それが非暴力直接行動の理解を妨げ、各種暴力論を混乱させる最大の理由になっている」ことを云った。

ところで、いままでにぼくが出会ったかぎりでは「非暴力直接行動」を批判する文章のすべては、必ず「直接行動」ぬきであるとともに、△個人暴力Vと△社会暴力Vを混淆している。現代暴力論ノートをよんで共鳴してくれた人さえほとんど同じ轍をふんでいる。

つまり、大ていは「暴力に、よい暴力（たとえば人民の）と悪い暴力（たとえば支配者の）とがある」という二分法にとらわれてしまう。このよい暴力を支持するという通俗的暴力論は、心情的にきわめて理解しやすい。が、それは現実への具体的適用にあたると、必ず自分の（自分の側の）暴力は良い—ということにならざるをえない。そしてめいめいが良い暴力と主張するとき、それはほとんど論理の意味を失ってしまう。勝てば官軍の暴力論と差異がない。

△非暴力直接行動Vが、その暴力論で取扱うのは、もっぱら△社会暴力Vの問題である。だから個人暴力は別

の関連問題としてある。厳密には対象外のものである。

その意味で、戦争＝暴力というとき、その暴力はあきらかに社会暴力V以外のものではありえない。だから社会暴力Vは社会暴力V以外の社会暴力Vと読みかえることで、はじめて問題を正しくとらえたと云える。

同様に社会暴力Vのような革命戦争もVは社会暴力Vのような革命戦争である。とすれば世上しばしば一しよに扱うことによって論理的混乱の原因となっている社会暴力Vは、革命戦争に短絡するのでなく別の問題として考察されねばならぬだろう。

それは社会暴力Vが戦争Vでないように社会暴力Vが即社会暴力Vとならないことを考えれば明らかである。

くりかえすならば、社会暴力Vそれゆえに戦争Vを論

社会暴力Vの意味

たとえば「きみがウリだ」など云うと、あわてて「オレそんなじゃないヨ」と云う人がたくさんいるだろう。その場合、こだわるのは「ウリの」と云う部分で、「まだ自分はそれほどウリのことを知ってるわけじゃないし何もしないし」ということがあってにちがいない。だが、そのような発想からでは、絶対ウリと出会うことはできない。ウリが、もっと気軽く軽薄に参加を——と云う時、それは、まるっきり発想の転換を意味している。ウリ宣言やメンバーの任務というのが、自分と別に存在して、それに自分が努力して近づいていくのではなくて、ウリ宣言や任務をよんで、ふと自分のなかにあるウリを発見する——つまり自己の内部を組織する——とき「きみはウリの仲間」なのである。

ずる時、もともと生命力の発現として出てきた社会暴力Vと全く異質の社会暴力Vと、その何れを論じているのかを明確に区別して、その区分定義を前提にしないかぎり、論理は必ず混乱矛盾して、単なる自己の立場の心情吐露でしかなくなるということである。

付注2：蛇足ながら、ぼくは本稿でぼくの社会暴力観Vすなわち社会暴力Vが云う革命とは何かVをも語ったつもりである。……

